

ルカによる福音書 17 章 20 節－18 章 8 節 「人の子の日に備えて」

1A 只中におられる主 20－21

2A この時代に捨てられる主 22－25

3A 突如襲いかかる滅び 26－37

1B 自己追及の果て 26－33

2B 残される者の滅び 34－37

4A 失望しない祈り 1－8

本文

ルカによる福音書 17 章を開いてください。20 節から 37 節までをお読みしたいと思います。(本文を読む。)

私たちがまさに今、終わりの日に生きていることは数々の徴を見えています。イエス様が弟子たちに、こう言われました。「それから、イエスは彼らに言われた。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起り、恐ろしいことや天からのすさまじい前兆が現われます。(ルカ 21:10-11)」戦争が起り、そして地震も頻りに世界各地で起こっています。そしてエボラがアフリカで大変な問題になっています。そして、イエス様はキリスト者が迫害を受けることを語られます。「しかしあなたがたは、両親、兄弟、親族、友人たちにまで裏切られます。中には殺される者もあり、わたしの名のために、みなの方に憎まれます。(21:16-17)」私たちは、世界各地で、特に中東とアフリカとアジアにおいて、キリスト者が前代未聞の迫害を受けていることを知っています。イスラム過激派による残虐な仕打ちは、イラク人キリスト教徒が ISIS から逃げている報道でご存知であろうと思います。

そして、7月から約一か月の間続いた、イスラエル軍によるガザに対する作戦にて、大きく浮き彫りにされた預言の地図があります。まず、イスラエルが世界からこれまでにない非難を受けました。そのしていることは、主権をもった国であればどこでも行なう防衛行為であるにも関わらず、あまりにも不均等な非難を受けました。ヨーロッパを中心に、過去のナチス台頭を思い出させる酷い反ユダヤ主義が蔓延しています。ゼカリヤ書 12 章には、世界の国々がエルサレムに向かって攻めてくると預言しています。そして、アメリカの力は弱くなりました。アメリカがイスラエルを擁護するのではなく、むしろ非難するほうに回りました。

しかし、不思議な事が起こります。エジプトを始め、周囲のアラブ諸国、具体的にはエジプトとヨルダン、そしてサウジアラビアとアラブ首長国連邦が、沈黙を保ったことです。エジプトはハマスをあからさまに非難しました。これまでイスラエルを非難する急先鋒にいたアラブ周辺諸国が、イスラエルをしていることを沈黙によって支持したのです。それは、それぞれの国々にも同じようにイス

ラム原理主義過激派組織があり、国を不安定にさせているからです。そして、ハマス等、過激派組織を助けているのがイランです。そこで、エジプト、ヨルダン、サウジと首長国連邦は、イスラエルと共に緩い連携を持つようになってきました。これは、あり得ないことでした。

そしてロシアの拡張主義が止まることを知りません。イランと手を組み始めています。さらに、トルコが反イスラエル政策で際だっています。スーダンがイスラム原理主義の台頭があります。これらの国々は、エゼキエル書 38 章にある、イスラエルを攻め込む国々であります。そこに書かれている、攻めてくる国々に、サウジやエジプト、ヨルダンなどの国はありません。エゼキエル書 36 章と 37 章は、すでにイスラエルの国が建てられたことによって実現しつつありますが、38 章と 39 章も成就が近づいているのではないかと、と思われる程です。

このように、世界における国々の動きがまさに、主ご自身が語られた通りになっています。では、私たち日本では、終わりの日においてどのような預言が、神の言葉の実現が近づいているのでしょうか。それが、今、読んだ箇所になります。

1A 只中におられる主 20-21

20 さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。21 『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

イエス様は弟子たちと共に、今、エルサレムに向かっています。エルサレムに行けば、その数日後に十字架につけられることになっていました。そのような最後が近づいている時に、パリサイ人から今のような質問を受けられました、「神の国はいつ来るのか」と。当時のイスラエルの国情は、私たちには想像が難しいと思います。イスラエルの国は、ローマ、その前はギリシヤによって踏みにじられていました。戦争が次々に起こり、ユダヤ人は聖書に書いてあるように、異邦人による支配を終わらせてくださるメシヤ、キリストの働きを待ち望んでいました。メシヤが、ユダヤ人を圧迫しているローマを打破して下さり、神の国を打ち立ててくださると思っていたのです。

そこで、「神の国はいつ来るのか」と尋ねています。しかし、これは正直な疑問ではなく、疑いと非難の言葉であります。「あなたの働きによって、神の国が到来するような兆しが何も見ることができないのだがね。」というものです。

その批判に対してイエス様が答えられました。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある。』とか、『あそこにある。』とか言えるようなものではありません。」イエス様がここで言われていることは、パリサイ人たちが疑いの目で見えても、それによって来るようなものではないということです。イエスが来られてから、病人を治したり、悪霊を追い出

したり、盲人の目を開けたりと、預言者たちが、メシヤが行なうと前もって告げていたことを、イエスさまは行っておられました。ですから、それでイエスがキリストであることを認められるのに、彼らは自分を捨てることをせず、イエスに疑いをかけつづけました。「人の目で認められる」という言葉は、そうした否定的に物事を見ていくことを意味します。

そしてこう言われます。「いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」この訳はとてもいいです。神の国は、ここにある、あそこにあるというものではありません。パリサイ人たちの只中におられる、イエスご自身が神の国であります。イエスをキリストして、また自分の主として受け入れることなくして、神の国がどこにあるのかと探しても意味のないことです。イエスご自身に触れられる時に、私たちは神の国の現実に触れることができるのです。

今、世界がいろいろと大変なことになっていますが、そのようなことよりもまず知らなければいけないのは、イエス・キリストご自身です。私の父親は、初めて教会に通おうと思った時に、小説「レフト・ビハインド」をもって教会に行きました！私が、「お父さん、聖書を持って行ってね。」とお願い、それから九か月ぐらい経ってからイエス様を信じました。世界で何が起きているかを知るよりも、すべての中心であられるイエス様を心にお迎えします。

2A この時代に捨てられる主 22-25

そしてイエス様は、パリサイ人ではなく弟子たちに対して、神の国のことを教えられます。

22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。23 人々が『こちらだ。』とか、『あちらだ。』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。24 いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。

パリサイ人と違って、弟子たちはイエスがキリストであることを受け入れている者たちです。彼らによって、神の国はイエスご自身であること、この方がおられるところに神の国があることを知っていました。

しかし今、イエスがおられて、それでこの地上に神の国が立てられるという時ではないのだ、と語っておられます。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時」というのは、イエスが十字架に付けられ、三日目によみがえられ、それから天に昇られるので、しばらくの間、イエスを見ることのないことを言われています。イエスは再び戻って来られる時にならないと、見ることはできません。

そして、「人々が『こちらだ。』とか、『あちらだ。』とか言っても行ってはなりません。」と言われて

います。これは偽メシヤを求めて、こちらだあちらだと言っている姿です。ユダヤ人の中には、偽メシヤが数多く出てきました。135 年には、バル・コクバという人がローマに対するユダヤ人反乱を指揮したのですが、ラビが彼のことをメシヤと担ぎ上げました。彼らはローマに負けて、それ以来、イスラエルの地にユダヤ人をローマ皇帝は追放したのです。そして異邦人の間でも、偽キリストは多くいました。文鮮明は死にましたが、イエスのようにはよみがえりませんでした。

しかし、「いなくまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように」主は戻ってこられます。世界中の人々が見ることができるような形で戻ってこられます。「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。(黙示 1:7)」

そして、これから弟子たちは、人の子が来られることよりも前に、大事な試練を通らなければなりません。「人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。」これからイエス様は十字架につけられます。「この時代」というのは、「世代」と言い換えたようが分かり易いとおもいます。その世代のユダヤ人によって拒まれ、そしてその世代のユダヤ人が紀元 70 年のローマによるエルサレム包囲によって世界に散らされる事態へとつながります。

イエス様にお会いできるということは私たちの願いですが、その前に私たちが知らなければいけないのは、弟子として生きていくことです。神の国の中に生きるということは、ここにあるように自分を捨てて、日々十字架を負い、それでイエス様に付いていくことであります。

3A 突如襲いかかる滅び 26-37

1B 自己追及の果て 26-33

26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。27 ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。

ここからが、イエス様が戻って来られる時に私たちが真剣に聞かなければいけない言葉であります。イエス様が来られる時は、ノアの箱舟の時と、ロトの時と同じだということです。それは第一に、「神なしで、自分たちの生活をしている」状態です。食べたり、飲んだり、結婚したり、また商売したり、建物を建てたりしていますが、それらのことをする時に神のことを考えずに行っている状態です。そして第二に、これらのことを行なっているときに、突如として滅びが襲いかかることです。ノアの箱舟も、その戸が閉められてから雨が降り始めました。ソドムとゴモラも、火が突如として降りました。

ヤコブ 4 章 13-15 節に、このような警告が書かれています。「13 聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」14 あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。15 むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」主のみこころによって生きていて、それだから飲んだり食べたりできるし、結婚もできるし、御心なら商売もできるのです。ところが、まるで自分たちだけで生きているかのように、その計画や行動に神が度外視されているのです。

これが私たちの国、また他の豊かな社会に対する警告です。これらのものは、終わりの日には過ぎ去ります。これらのものを神よりも大事にしているから、自分のことばかりを気にして、他者を顧みない社会となっています。こうした社会に対して神は怠りない裁きを行なうことを誓われました。ヤコブ 5 章を開いてみたいと思います。「1-3 節 1 聞きなさい。金持ちたち。あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい。2 あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており、3 あなたがたの金銀にはさびが来て、そのさびが、あなたがたを責める証言となり、あなたがたの肉を火のように食い尽くします。あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。」弱い人、霊的に貧しい人、こうした人々にキリストの愛をもって接していくのが教会の姿であり、また人間本来の姿であります。ところが自分が幸せになること、自己追及をすること、自分が魅力的になること、自分の将来の計画を立てること、すべて「自分」というナルシズム、自己愛の文化と社会の中に生きているのです。

こうした社会に対して、神は終わりの日に怠りない裁きをくだされます。黙示録 17 章に、地上の王たちと不品行を犯している大淫婦として現れます。「この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手を持っていた。(17:4)」そして、これらの富は、地上に商人によって築き上げられたものだと 18 章にあります。「それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行ない、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得たからである。(18:3)」その富は、まさに商業主義であり、流行であり、人々が物を買わなければ済まないようにさせている制度であります。そして、神を信じる者たちに対して離れなさい、と命じているのです。「私は、天からもう一つの声がこう言うのを聞いた。『わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。』(18:4)」

これらはもちろん、趣味を持ってはいけなく、楽しみを持ってはいけなくということではありません。しかし神によって全てが与えられているという、神への全き依存と信頼によってこれらのものが恵みとして与えられているという位置に立っている必要があります。だから、これらのものがなくなっても主が取られるのだからと言って、主を喜んでいられるのがキリスト者の姿勢です。この世のものに執着しない、この世とは軽い接触にしておくのです。

30 人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。32 ロトの妻を思い出さない。33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。

これらの日常生活が、突如として無きものとなることをイエス様は語られています。「主の日は夜中の盗人のように来るといことは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。(1テサロニケ 5:2-3)」ここのイエス様の言葉を聞いていると、まるで津波に似ています。家財を取りに行く時間がないのです。そうすると逃げる時間がなくなります、死んでしまいます。それだけ滅びが早いのです。

けれども、事実、死んでしまった人々がたくさんいます。取りに戻っていった、また家族や知り合いの人を助けに行ったのです。けれども津波の時に、まず自分が高台に上ることを念頭に置いて、家族で全員、高台で会うことができたという話はたくさんあります。自分の持ち物への執着もさることながら、家族もいっしょに救われたいという執着も実は、全てが水で溺れ死ぬという原因ともなったのです。

それが、ソドムの時にはロトの妻がそうでした。ロトが町を出ていったら、その時に天から火を降らすことを天使は告げました。それでロトとロトの妻、さらに未婚の娘二人が逃げました。彼女はソドムにあるものに未練を感じました。それで他の三人よりも、歩く速度が遅かったのでしょう。あるいは、途中で引き返して家にあるものを取りに行っただけかもしれません。けれども、火が天から降った時に死海の水が一気に水蒸気になって彼女に、塩と共に降りかかって、それで彼女は塩の柱となったのです。

いかがでしょうか？ 私たちは、とても自分の生活を大切にしています。真面目に生きています。自分の仕事や勉強をしっかりとこなしています。それらはとても大事なことです。けれども、神なしにそれらのことを行なっているのであれば、それは自分のいのちを愛していることです。しかし、人の命はそれを造られた神のものです。神を自分よりも愛しているから、初めて自分の命を大切にすることができます。どんなものよりも、また家族さえも、神より大切にすることはできないのです。このことをイエス様は、「自分のいのちを失う」と言われました。「自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

2B 残される者の滅び 34-37

34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりを取られ、他のひとは残されます。」36 [本節欠如]37 弟子たちは答えて言った。「主よ。どこですか。」主は言われ

た。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」

主が戻られるということは、選り分けがなされることであります。今、話しましたように、主にあって一つのことを行なっている人と、自分のことだけ考えて一つのことを行なっている人では、同じことを行っているけれども、一人は残され、一人は取られるという大きな違いが出てくるのです。取られる人々は、主によってこの滅ぶ世界から救い出されるかたちで取られます。テサロニケ第一 4 章に、天からイエスが降りて来て、空中まで引き上げられる恵みが書かれています。「4:16-17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

ですから、世にある仕事をしてはいけないということではありません。むしろ、世にあって生きていくのです。けれども、主を思って生きていく人はこれから来る大患難から救われるのです。弟子たちは、どこで、そんな取られて、残されるようなことが起こるのかと尋ねていますが、イエス様は答えられます。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」これは、終わりの日、イエス様が戻って来られる時に、神とキリストに反抗する国々の軍隊がイエス様によって滅ぼされて、その積み上がった死体を猛禽類がついばむという場面です。黙示録 19 章後半に書かれています。つまり、イエス様はこうした物質主義、自己愛の社会の中では、最後はこのように猛禽が来て死体をついばむような状態に成り果てるのだ、ということでもあります。

4A 失望しない祈り 1-8

そしてキリストの弟子に対して、イエス様は勧めを行ってくださいます。有名な、「不正の裁判官」の例えによる、祈りについての教えですが、終わりの日についての話の中でイエス様がお語りになっているのです。

1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』』と語っていた。4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』』と言った。」6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

いつでも祈り、失望せずに祈り続けることは、目的があります。それは、神が選民のために裁きを必ず行ってください、ということです。キリスト者としてこの地上に生きている時に、私たちはたとえ物理的な迫害を受けていなくても、むしろ迫害がないところにある霊的誘惑の中にいつもさらされています。神はいらない人の制度がしっかりしているから、という強い圧力を感じます。神なしで生きていくように仕向けていきます。ですから、私たちは今まで以上に強い圧迫を受けており、しっかりと立っていないといけません。

そこで必要なのは、しつこい祈りです。果たして主が戻ってきてくださるのか、そう思って疲れていきます。神の正しい裁きがなされるよう祈っていて、果たしてそれが聞かれるのか疑問に思います。けれども主は、聞いてくださいます。けれども、イエス様が実行に移そうとしている時に、その時まではたして信じ続けている信仰が見られるのかどうか、と案じておられます。あきらめて信仰が揺らいでしまう試練の時なんだよ、とイエス様は教えておられるのです。

いかがでしょうか、私たちは長いこと祈り忘れていた祈りの課題はありませんか？あきらめてしまっていることはないですか？祈りをしつこく行っていますか？ここに私たち、終わりの日に生きる者たちが試されるところです。